

西田哲学における「習慣」の意義

——ラヴェッソン、ベルクソン、メーヌ・ド・ビランの受容において——

熊谷 征一郎

序

本稿は表題の示す通り、西田哲学における「習慣」を主題とするものである。現在の研究状況に鑑みるに、西田哲学において習慣が重要性を有していると認識されているとはいえない。否、西田において習慣が論じられていること自体、必ずしも周知のこととは言えない。管見に入ったかぎり、西田における習慣の意義に着眼したものとしては、西田の弟子である三木清が、「西田哲学の性格について——問う者に答える——」と題された論稿において、西田哲学の思想を「習慣性、日常、*the everyday*」などを考える論理的基礎となり得るものとして重要であると思う」とわずかに論及しているが、西田における習慣の位置づけと意義に関してはそれ以上論じられていない。また、西田自身も、一般に哲学において

習慣が「重要な役目」²⁾を荷うものとは見なされていないことを認めている。しかしながら、西田は比較的初期から習慣に関して言及しており、就中、後期においては習慣が「重要な役目」を荷えるものとして提示されている。習慣が必ずしも十分には着目されてこなかった理由としては、習慣が重要な文脈で提示されているにもかかわらず比較的言及が少なく、後期では二つの論文においてのみ集中的に論じられていること、また習慣がやや唐突に出されてきている観があり、後期哲学全体においていかなる位置を占め、いかなる意義を有するかが必ずしも明らかでないことが挙げられる。したがって後期西田哲学において習慣を位置づけ、その意義と重要性が明らかにされねばならない。

西田は習慣を論じる上で、いわゆるフランス・スピリチュアリズムの系譜の哲学者の所論を踏まえている。初期においてはベル

クソン（一八五九—一九四一）とメーヌ・ド・ピラン（一七六六—一八二四）を、後期においてはさらにラヴェッソン（一八一三—一九〇〇）を踏まえている。したがって本稿においては、西田が三人の所論を如何に、また如何なる方向で受容あるいは批判したかを検討することを通じて、西田における習慣の意義と特徴を説明することが課題である。

一 習慣と「意識」の生起

——ベルクソンおよびピランに対して——

序において、前期においても習慣に関して言及がなされていると述べた。後期に比した場合、前期においては習慣が必ずしも重要性を有しているとは言い難いにせよ、前期の習慣論と後期のそれとの間には密接な繋がりがある。

前期においては、習慣はある種の「意識」との連関において論じられている。『芸術と道徳』（一九二三年）に収められた論文「美の本質」において、ベルクソンの所論が踏まえられつつ、西田自身の自論が展開されている。ベルクソンはその著『創造的進化』（一九〇七年）において無意識を二つに区別している。一つは「無い意識（conscience nulle）」（144/168）であり、一つは「無くされた意識（conscience annulée）」である（前者に関しては割愛する）。後者は、習慣によって機械的になされるに至った行動等に見られるように、「行為の表象が行為そのものの遂行によ

って阻まれる」（145/168）ことに起因する無意識である。その事例においても何らかの障害によって行為の遂行が阻まれるならば意識が現れることから、実は意識はそこにあったのであるが、行為の遂行によって行為の表象が「相殺」（144/168）されていたのだとベルクソンは解している。

右のような習慣に関するベルクソンの論及に着目し、西田は独自の思索を展開している。右のベルクソンの所説を踏まえた上で、次のように述べている。「単なる無意識と異なつた「無くなった意識」とは動作によって塞がれたものではなく、動作を内面化したものでなければならぬ。練達によって得たいわゆる受用底というのは単に機械的習慣ではない。画家が画を描く場合、むろん概念的判断に従うのではないが、また単に自動的運動ではない。そこには力の自覚がなければならぬ、反省的自覚ではなくして、行為的自覚がなければならぬ、いわゆるスタイルとは行為的自覚である。……動作によって塞がれることによって、すなわち主客合一によって生ずる意識があるのである」（三・二八—二八二、傍点は全て引用者）。この言葉は一見すると、ベルクソンの所論に批判が加えられているように見受けられるが、その実、必ずしも批判がなされているのではないと考えられる。「無くされた意識」に関する習慣の事例として、ベルクソンが挙げるのは「習慣的な行動を機械的にやつのける」（145/168）ケースである。その種の事例において行動が自動的・機械的になされることに關しては西

田も認めると考えられる。ベルクソンと異なるのは、西田が「無くされた意識」に関する習慣の事例として、芸術家の創作活動に見られるような「練達」を念頭に置いてのことである。練達においても機械的習慣と同様、通常の意識や概念的判断は無くなるのだが、そこには「力の自覚」あるいは「行為的自覚（スタイル）」があり、ある種の意識が生ずるという相違がある。練達において生ずる右の意識は——西田研究者には周知の——「骨」であると考えられる。『自覚に於ける直観と反省』（一九四七年）において、骨は認識対象として意識されるものではなく、芸術家等が「一種の力」（二・二六二）として意識するものであり、概念的知識にも増して「明瞭」かつ「精細」な意識であると述べられている。それはまさにここで言われている「力」の自覚としてのスタイルであると考えられる。

以上のように『芸術と道徳』においては、ベルクソンの所論を踏まえながらも、機械的習慣に代えて練達を考察の対象とすることを通じて、習慣がある種の意識を生ぜしめる意義を有するものとして把握されているといえる。同著に収められた論文「感情の内容と意志の内容」においても、やはり「意識作用」との連関において習慣が取り上げられている。同論文においてはメーヌ・ド・ビランの所論が取り上げられている。認識論において、我々は音を聴くことはできるが聴くことを聴くことはできないとして、「意識作用」の認識を否定する見解があるが、それに対して西田

は意識作用は反省によって対象化することによって知られるものではないとする。そして意識に「相反する両傾向」（三・三三一、三三二）があると洞察し、反省・対象化とは逆方向に意識作用の知を模索している。そこで手掛かりとされているのが、ビランの習慣に関する著名な所論である。ビランはいわゆる「習慣論」において習慣を受働的習慣と能働的習慣の二つに区別している。前者においては、印象が一定期間持続されるかあるいはしばしば反復されることによって漸次弱められ不明瞭となる。例えば香りや味に慣れるに従ってそれらを感じなくなる。それに対して能働性を有する知覚においては、反復によって印象は明瞭となる（三）。

西田は、後者の能働的習慣によってこそ、対象化によっては知り得ない意識作用が知られると洞察している。ビランの能働的習慣を踏まえつつ、次のように述べている。「私は右の如き有意的努力の意識があつて、始めて作用の意識というものが成立すると思う。我々は聴くことを聴くことはできぬ。視ることを視ることはできぬ。しかし……これらをメーヌ・ドゥ・ビランのいわゆる能働的感覚として知ることができる」（三・三三一―三三二）。ここで西田は、ビランの能働的感覚によって視る作用が意識されると捉えているが、ビランにおいては、習慣を通して知覚対象が判明になるとは述べられていても、知覚作用が知られるとは直接的には述べられていない。むしろ有意的運動が反復によって容易かつ敏活になるにつれ、運動あるいは努力が意識されなくなると述べられ

ており (10)、そこに西田の言うような「有意的努力の意識」や「作用の意識」が存するとは述べられていない。したがって能働的習慣において意識作用が知られるとするのは、西田自身の洞察を読み込んだものだと考えられる。

ここで能働的習慣において知られるとされる「意識作用」は、「真の、自我の直接の意識あるいは体験」(三・三三三―三三三)と換言されていることから、自覚の意義を有していると考えられる。西田の次著『働くものから見るもの』(一九二七年)の「前編」においてもその洞察が引き継がれている。同著ではメーヌ・ド・ビランの能働的習慣に論及する文脈で、「我々が技術を習う場合、それが習慣となるに従って、一種の確信を伴う」(四・六六―六七)という西田独自の事例が挙げられ、その「確信」において「働く自己の意識」(四・六六―六七)あるいは「意志の自覚」(四・六六―六七)が存すると洞察されている。そして習慣に関して次のようにいわれている。「習慣というのは、かかる意味において、自己が自己の内容を明らかにする一種の知的作用とも考え得る」(四・六六―六七)。ここでも、前著と同様に、能働的習慣が「自覚」を生ぜしめるものとして把握し直されているといえる。

二 創造の契機としての習慣

——ベルクソン批判を通して——

以上のように、西田の前期から中期にかけては、習慣が「行

為」と「意識」という連関において取り上げられ、ベルクソンやメーヌ・ド・ビランに独自の読み込みを加え転写することを通じて、習慣が「自覚」の意識を生ぜしめる意義を有していたと概括することができる。

西田の後期哲学においては物を作るポイエーシスが主題化されるが、そこでは習慣もより広い視園において問題にされ前期に比して積極的かつ重要な意義を有するに至っている。次の言葉は、習慣が歴史的世界の創造に深く関わっていることを示して余りあるであろう。「歴史的に物が形成せられるというのは、……偶然に物が現れるということではなく、そこに習慣というものがなければならぬ。……場所的な世界の自己限定は習慣的構成作用とすることができる。……歴史的に現れる偉大なるものは、大なる習慣の蓄積による」(八・二〇三)。西田は、歴史的の世界において物が創造されるのは「無から有が出る」(八・四四八)のではなく、そこには「固定せられた形」が存するのであって、創造は固定された形から始まるのだと洞察しているが、そこに習慣性が介在している。『哲学論文集 第三』(一九三九年)に収められた論文「人間の存在」において、歴史的制作の文脈で、ベルクソンの習慣論が新たに取り上げ直され、それを批判することを通じて、創造における習慣の本質性が強調されている。⁽³⁾

ベルクソンは、『創造的進化』において、植物から動物、人間に至る進化を生命の流れでもって一貫的に捉え、人間に至って自

由が最も実現すると捉えている。意識は、植物的生においては麻痺状態、動物的生においては本能、人間の生においては知性という在り方を取る。そのような大局的な視図から、習慣に関して次のように述べられている。「われわれの自由は、それが自己を肯定するときの運動そのもののうちに、いろいろな習慣をつくりだすが、もし自由が不断的の努力によって自己を新たにするのでないならば、自由はそれらの習慣によって窒息させられてしまうであろう。自動作用が自由を窺っている」(2815-152)。ここでは、習慣は生命進化の「唯一の大きな努力」を妨げるものであり、人間において実現した自由を「自動作用」と化し、自由を「窒息」せしめるものと見なされている。換言すれば、人間において知性として開花した意識を、再び植物の昏睡に後退せしめるものとして習慣が捉えられている。

右のような、習慣に関するベルクソンの否定的見解に対して、西田はそれを一面において認めつつも異なる見解を示している。すなわち歴史的な生命は元来作られたものから作るものへと動き行くものであるが、習慣は生命が「作られたものの側面」に固着し、「固形化」・「自動」化・「機械」化する「死の方向」であるとされ、ベルクソンの所論が敷衍される形で習慣の否定的側面が認められている(Ⅱ三七九)。しかしながら西田においては、生命が固定した形(習慣)を取るのとは生命にとって本質的な「契機」であることが洞察されている。「私はベルクソンと反対に、形作ることを

生命の本質と考えるのである。生命はいつも死をその契機として含んだものでなければならぬ」(Ⅷ・四四四)。ここでその所以が問題となるが、それを説明する上で次の言葉が手掛かりとなる。「我々の生命は固定せられた形から始まる。しかもそれはいつも自己自身を越えるという意味において固定せられたものである」(Ⅷ・四四八)。別の箇所でも言われているように、いやしくも「形を破り行く」(Ⅷ・四五二)所に生命があるのだとすれば、超え破られるべき「固定せる形」あるいは「死」は生命にとって必要不可欠な契機となる。固定化する死の方向が存すればこそ、それを越え破る方向として生の方向が成立し得る。かくしてベルクソンが批判的に踏まえられつつ、西田において習慣は創造にとって本質的に不可欠な契機として位置づけられているといえる。

西田の後期哲学において歴史的な世界における創造が主題的に取り上げられる中で、「行為的直観」概念が重要な位置を占めてくる。行為的直観にも種々の側面があるのだが、物の世界を身体的に把握することで物の世界から自己矛盾的に行為が惹起されることであると規定し得る。習慣が創造において不可欠な契機であった以上、必然的に行為的直観とも連関を有してくる。それは次の言葉にも示されている。「能動的習慣というのは、歴史的世界の自己限定の立場から言えば、行為的直観と考へべきものである。それは歴史的な生命の発展と考えられるものである」(Ⅷ・二〇三)。ここで言われている能動的習慣とは、むしろ前節で取り上げたビ

ランの概念である。その能動的習慣が、後期に至って、行為的直観に擬えられた所以が問題となるが、(西田も取り上げているように)ピランは能動的知覚の事例として、手が物を掴む触覚が進展するに伴って、物を見る視覚も愈々発達する事例を挙げている(100)。そのように行為的・構成的に物の世界を掴むことにおいて、能動的習慣と行為的直観との間に近さが見いだされたのだと考えられる。

三 習慣および意識の世界性

——ラヴェッソンの転釈を通して——

以上、後期西田哲学において、歴史的世界の創造性における習慣の位置と意義を論じてきたが、西田は最晩年の論文「生命」(『哲学論文集 第七』(一九四六年)所収)において、再び前期と同様に「意識」との連関において習慣を取り上げ直している。ここでは単に前期の思索が繰り返されているのではない。習慣を世界の習慣として展開する思索を経て、同論文においては世界的地平において意識が捉え直されている。そこで西田が共感をもって取り上げているのはラヴェッソンの習慣論である。

ラヴェッソンは『習慣論』において、存在者を無機物から、植物、動物、人間へと段階的に捉え、それぞれの段階において習慣を考察している。そして段階を上るに従い、習慣が明瞭に顕われるとする(無機物から動物までに関しては割愛する)。人間的生

命すなわち意識的生命においては、「はたらきとはたらきを見ることとは合一」(20/25)しており、習慣の「範型(type)」(20/25)を見いだすことが可能となる。運動が反復あるいは持続されると能動性が昂まり、運動は敏活・確実になされるに至り、知覚も明瞭となる(27/36)。それに伴って努力は消え行き、意志は次第に「傾向(tendance)」(29/40)あるいは「傾性(pénchant)」(29/40)となっていく。「不明瞭な能動性(spontanéité irréfléchie)」(29/41)が生まれる。その傾性は次第に意識の領域を出て有機体の受働性の内に降って行き、そこに定着し凝集する(30-31/43)。そして有機体の器官や組織の形式を種々に変容せしめ、有機体の無際限の多様性の中へと分散して行く(33/47)。そして時と共に再びそこから運動の活力が湧き上がってくる。その際、運動は単に盲目的な機械的世界の支配下においてなされるのではなく(38/48)、意志の領域に戻り運動がなされるとされる。「一旦意志の領域の外へ出た運動が時とともに再びそこへ戻る……習慣によって次第に意志の支配を脱せしめられる運動は、それだからといって、知性の範囲を去って盲目的な機械性の支配の下にうつるのではないのみならず、更に、その運動は、それを生み出した当の知性的活動を離れることがないのである」(33/47)。

以上のラヴェッソンの所論において、西田が着眼するのは、傾性が一旦有機体の無際限の多様性のうちへ分散し、再び自発的に運動を始める、いわば転換の局面である。まず、傾性が有機体の

受働性の内に定着し凝集することに関して、「そこに絶対現在の自己形成性に結合するのである」(二一・三六五、三六六)という独自の解釈が加えられている。先述したように、西田において空間は世界が自己維持する方向に位置づけられているのであるが、右で言われている絶対現在において、「世界の意識面・自己保存面・記憶面」(二一・三四九)に触れるものと考えられる。そして世界がその記憶面から習慣的に自己限定する時、世界は一面において意識的であり、そこに人間の「意識の根源」(二一・三四七、三六五)があるのだと洞察されている。それはラヴェッソンにおける転回の局面に関して、さらに踏み込んで次のように言われていることにも示されている。「歴史的世界は、作られたものから作るものと、習慣的に自己形成的であり、我々の意識も此から出て来る」(二一・三六五)。先の論文「行為的直観の立場」における用語を用いるならば、静(留)から動に転ずる所に意識が生ずるということである。このようにして、通常、単に個人に属するとみなされている意識が、「世界の自己形成の契機」(二一・三七〇)として位置づけられている。意識が世界の自己形成の一面である故にこそ、ラヴェッソンが、意識的生命において習慣の「範型」が見いだされるとする局面において、西田は「世界の自覚」(二一・三六〇)を見いだしているのである。

以上のように、ラヴェッソンの所論が取り上げられつつ、習慣は世界の習慣として捉えられ、それによって顕わとなる意識も世

界の意識として位置づけ直されているのであるが、ラヴェッソンは『習慣論』において直接的には右のようなことを述べていない。そもそもラヴェッソンにおいては習慣および意識の帰趨あるいは主体が問題とされていないと言うべきである。ラヴェッソンにおいては、存在の諸段階において習慣が如何なるものであり如何なる影響を及ぼすかが論じられているに留まり、習慣の帰趨あるいは主体が存在者であるか、あるいは世界であるかということは問題にされていない。意識に関しても、傾性が空間の多様性のうちに分散し、知性を離れることなく再び運動を始めるとは述べられているが、その帰趨の在処はやはり問題とされていない。それゆえ、ラヴェッソンの所論のうちに、人間の習慣および意識が矛盾的自己同一的に世界のそれであるとする洞察を読み込むことは不可能ではなく齟齬を来すことではないと思われるが、やはりそれは西田自身の洞察であり転釈であると言うべきである。西田は『哲学論文集第一』において打ち出した歴史的世界の習慣という着想から、ラヴェッソンにおける習慣に世界性を読み込み転釈することを通じて、人間の意識および習慣を世界の習慣のうちに根差せしめたのだと言うことができる。

結 論

西田の前期においては、習慣は意識との連関において取り上げられていた。すなわちベルクソンを批判する形で、習慣が反省的

認識によっては捉え得ない行為的自覚（スタイル）を生ぜしめることが洞察され、またビランの能働的習慣に読み込みを加える形で、習慣が対象化によっては捉え得ない意識作用を知らしめると洞察されていた。つまり前期においては習慣が非対象的意識を自覚せしめる意義を有していたと言うことができる。後期においては習慣の世界性が前面に打ち出され、自然界から人間の社会・文化・時代の推移をも射程に収めつつ、習慣は作られたものから作るものへと動く歴史的世界の自己形成の仕方にして、生成発展の原理（形のメタモルフォーゼ）という意義を有するに至った。最

晩年においては再び前期と同様に、習慣が意識との連関において取り上げられていた。そこでは単に前期の思索が繰り返されるのではなく、習慣を世界の習慣として把握する思索が踏まえられ、意識も世界的地平において捉え返された。そこでは存在の諸段階を、習慣を原理として一貫的に捉えるラヴェッソンの所論の要となる転換点に、習慣の世界性を読み込むことを通じて、人間の意識および習慣が歴史的世界の習慣のうちに根拠づけられたのである。

* 西田からの引用は、『西田幾多郎全集』（岩波書店、一九八七―一九八九年）を用い、引用文末尾に巻数と頁数を付した（なお一部岩波文庫『西田幾多郎哲学論集Ⅱ』（上田閑照編）を用いた箇所があり、その場合引用文末尾にローマ数字でⅡと付し頁数を記した）。

* ベルクソンからの引用は次のテキストに拠り、引用文末尾に原典と翻訳の頁数を付した。

L'Évolution Créatrice, PUF.

松浪信三郎・高橋允昭訳『創造的進化』（ベルグソン全集第四巻）白水社、一九六六年。

* ラヴェッソンからの引用は次のテキストに拠り、引用文末尾に原典と翻訳の頁数を付した。

De l'habitude, Paris: Fayard.

野田又夫訳『習慣論』岩波書店、二〇〇一年。

* メーヌ・ド・ビランからの引用は次のテキストに拠り、本文中引用末尾に頁数を付した。

Influence de l'habitude sur la faculté de penser, in Œuvres Complètes, éd. Par P. TISSERAND, t. II, Genève-Paris, 1982.

* 引用文中の……は引用者による省略を表し、傍点は引用者が付したものである。

(1) 『三木清全集』第一〇巻（岩波書店、一九六七年）、四三〇頁。

(2) 西田幾多郎『統思索と体験』『統思索と体験』以後、岩波文庫、一九八〇年、一四三頁。

(3) すでに澤瀉久敬が問題提起しているように（澤瀉久敬『メーヌ・ド・ビラン』弘文堂書房、一九三六年、七二頁）、知覚の事例は、厳密にはビランにおいては受働的習慣の事例として挙げられている。しかしながら、知覚は感覚に比して能働的と考えられ、西田も能働的習慣の事例として挙げている（三・三三二―三三三）ことから、本稿においても能働的習慣の事例として扱った。

(4) 西田のベルクソン批判の中には、『意識に直接与えられたものに関する試論』において展開された純粹持続をデフォルメしている

ものがある。根田隆平は、『物質と記憶』を視野に入れつつ、西田の批判が必ずしも妥当しないことを論じている。根田隆平「西田とベルクソンにおける「身体」の意義に関して——行為的直観と可能的世界——」、『比較思想研究』第二号、一九九五年。

(5) この事例も、厳密には受働的知覚の事例である。注(3)を参照されたい。

(6) 習慣をめぐる人間と世界との矛盾的自己同一的構造は、技術におけるそれと同型であり、技術のそれに関しては、小坂国継によってすでに指摘されている。小坂国継『西田幾多郎——その思想と現代』ミネルヴァ書房、一九九六年、一七四頁。

(くまがい・せいいちろう、日本哲学史、

大阪大学非常勤講師)